

展覧会について

私がCDを複製し続け、ネットワークを介して知人の写真を撮り続けるのには理由がある。それは両方とも瞬く間に消費されていくからだ。一方はデータとして、もう片方はコミュニケーションの痕跡として。

私は私の身の回りの物と人が段々と失われていくように感じ、それに喪失感を覚え始めた。私はネットワーク技術を否定しない。“むしろその恩恵を十二分に受けている”。そして、その喪失感を埋める行為が結果として作品となっているし、そこから更に新しい、面白い方法を探している。

私は現在の身の回りで加速する消費速度に恐怖を感じている。それはもしかしたら、「好きな曲だけダウンロード」や、Facebookの「いいね！」など小さなことかもしれない。しかし、その行為の裏にある理由に気がつきにくくなっている。

ネットワークの技術の発展により著作権やプライバシーの権利が問題となっているが、法的にも完全な線引きが出来ないグレーな状態である。それはネットワーク技術の中で人間と人間の感情の衝突が起因しているからだ。

私はただその現状を面白く「ありのまま」映し出すことに興味があるのかもしれない。（—アーツ前橋「Arts meets 02」より）

今回初めて展示される写真の作品は、携帯端末やネットワークの発達に伴う、「撮影する（される）」こと「見る（られる）」こと、そして「公開する（される）」ことへの意識の変化を写真作品として提示している。写真はネットワークに接続された携帯端末と、web上で公開されているライブカメラとを接続し、作者手製のピンホールカメラ装置を用いて、携帯端末の光だけで撮影されている。作者の視点、被写体の視点、そしてカメラの設置者の視点が入り組んだ写真作品となっており、被写体はカメラからの視点を認識することなく撮影されている。そしてその視点はwebを通じ世界中に向けて公開されている。

相川 勝